



研究ノート：アボリジニの神話伝承

メタデータ	言語: ja 出版者: 室蘭工業大学環境科学防災研究センター環境評価・保全 部門「環境の人的側面に関する研究」グループ 公開日: 2007-12-13 キーワード (Ja): アボリジニ, 神話, 夢の時代, ドリームタイム, フッサール, 現象学, 生活世界, 文化 キーワード (En): 作成者: 二宮, 公太郎 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10258/293

研究ノート / アボリジニの神話伝承

二宮 公太郎

A Study Notebook / Aborigine's Myths

Kohtaroh NINOMIYA

キーワード：アボリジニ，神話，夢の時代，ドリームタイム，フッサール，現象学，生活世界，文化

アボリジニたちにとって、人間と人間以外の動物との間に境界は無い。彼らは、自分がワラビーの子孫だとか、コアラの子孫だとか、言ったりする。さらに、自然のあらゆる事物との間にも境界は無い。このことは、天体や気象現象に関わる神話の中に、顕著に現れている。空間的な距離や高さについても、区別するという観念が基本的に無い。また彼らは、覚醒しながら夢を見て、そのうちで時間の隔たりを飛び越え、創造期に自ら入り込む、ということをする。要するに、<類><空間><時間>といった、あらゆるカテゴリーにおいて内部に境界が無い。

このようなアボリジニの自然観を、天体や気象現象に関わる神話のうち、幾つかの典型的なものに焦点を合わせて、具体的に見て行こう。

1. 天体

まず、天体の形成に関する彼らの考え方を見よう。太陽と月、そして星、の順に。

1.1. <太陽>

太陽の形成に関するノーザンテリトリー地方の伝承は、こうである。

「夢の時代」初めには太陽が無かった。ある娘が、思い通りの結婚を妨害され、部族を捨て、放浪していた。祖先の精霊たちは、彼女に同情し、彼女を天界へ引き上げた。娘は、部族が自分を心配しているのを知り、彼らのためにできることをしようと思った。彼女は、天界に大きな焚き火を作った。夜にはそれを消す。娘は孤独だが、地上の人々が喜ぶことが、彼女の喜びとなった。

ここに出てくる<祖先の精霊たち>は、アボリジニの神話の多くに登場する。ギリシャ神話の神々にも似ている。この精霊たちは、彼らの神話の中で、いつも優しく人間たちを見守っている。

太陽を作った娘は、まず地上で生き、次に天界でも生きる。アボリジニたちにとって、天界と地上とは連続的である。天界は、必ずしも死んで行くところという訳ではない。

もう一つ、太陽に関する別の伝承を見てみよう。ここでは、「夢の時代」、太陽は既に在った。」とされる。しかし……

下にもう一つの空が覆っていて、地上は暗かった。カササギたちが力を合わせ、下の空を退かそうと持ち上げて運んでいた。彼らは誤って下の空を地面に落とし、下の空は粉々に砕け散った。太陽が現われた。それ以来、夜明けにはカササギたちが騒ぐが、誰も文句を言わない。

「下の空」という発想の、ユニークさに驚く。高さの概念が自由なのである。他方、「夜のとばり」という言葉が日本語に在り、西洋でも“veil”という語を使って似たことを表わす。これらは観念的なものだが、アボリジニは、これを物質的なものと感じたのである。

カササギたちが持ち上げるという発想もユニークである。殆ど「荒唐無稽」の感を受ける。日暮には、毎日この「下の空」が張られるのだろう。カササギたちは、毎日これを取り除けるのだろう。人間たちは、カササギに感謝である。

これはアーネムランド地方の伝承である。アボリジニたちに統一的な一つの神話が存在すると考えるとすれば、この話は先の話と「矛盾」する。しかしそうではなく、地方ないし部族によって、伝承は異なるのである。

1.2. <月>

こんどは、月の形成に関する神話を見よう。

「夢の時代」にジャバラという優秀なハンターがいた。彼の妻は、話し好きの男と夢中になって話していて、その間に幼い娘が小川で溺れ死んでしまった。怒ったジャバラは妻を殺してしまった。心優しい精霊たちは、二人の亡骸を天上に引き上げ、蘇らせた。反省したジャバラは、一緒に暮らせるよう精霊たちに頼んだ。宇宙のなかで探し出すことを条件に、それは許された。ジャバラが宇宙を漂いながら焚くキャンプの火が、月に見えるのだ。

妻と娘は地上で死んで天上で蘇る。ジャバラは生きたまま天上に移る。地上と天界との、このような自由な関係に注意しよう。生の世界と死の世界の間には、断絶ではなく連続が在る。

太陽に関する神話の一つもそうであったが、ここでも、光る天体は、やはり人間が焚く火である。アボリジニたちにとっては、人間が天体よりも先に在って、何の不思議も無い。天体は、人間が作ったものであっても、全く構わないのだ。

1.3. 星

次に、星である。

<明けの明星>

明けの明星ができたのは、このようにしてである。

人間を捕らえて食う巨大なワシタカがいた。彼には人間の妻が有り、妻の母親と妻の友人、合わせて三人の女と、巨大な木の上で暮らしていた。女たちも人間を食った。人間たちは、このワシタカを退治しようとして、キツツキと木

登りネズミに頼んだ。キツツキと木登りネズミは、木の途中で一泊して（それほどこの木は大きい）ワシタカの小屋に近づき、火を付けた。ワシタカと女たちは、みな焼け死んだ。ワシタカの燃える炎が、明けの明星となった。

雄の鳥と人間の女が結婚するという奇妙な関係も成り立つ、ということに注意しよう。〈類〉の区別は、アボリジニたちに無い。

途中で一泊（キャンプ）しなければならないほど、この木は大きい。道のりに関して、地面を水平に進むことと、木を垂直に進むこととの間に、差は無い。すなわち、空間の方向に関する区別が無いのである。

この話ほど、合理的な解釈を拒むストーリーは無い。木が大き過ぎて、人間たちには登れない。だから、敵を自分たちで滅ぼそうとせず、キツツキと木登りネズミに頼む。それは分かる。しかし、頂上につくまで途中で一泊しなければならないほどの木とは、どんなに大きな木なのだろう。そのような木を住み家とするワシタカとは、どんなに大きな生き物なのだろう。そんな生き物が、どうして普通の大きさの人間の妻と結婚生活を営み得るのだろう。

大抵の場合、アボリジニの神話の内に、何かの寓意を見出そうとすること、或いは、その内容や登場人物（動物）たちに、何らかの解釈を施そうとすること、このような試みを為そうとする気は、直ちに萎えさせられる。この伝承に典型的なように、それほど「支離滅裂」なのだ。まるで〈夢〉をそのままストーリーにしたような感じを受ける。

〈南十字星〉

日本では馴染みが薄いですが、地球の南の方では見える四つ星“南十字星”の誕生は、こうである。

空の王が赤土から二人の男と一人の女を造った。男の一人が飢えて死んだ。死の精霊が死んだ男を白いユーカリの木のホコラに押し込めた。雷が起り、精霊と男ごと木を引き抜いた。木は銀河の近くまで飛び、そこに根をおろした。やがて木だけが見えなくなり、死の精霊の二つの眼と最初に死んだ人間の二つの眼が光っている。

この話は、出だしがアダムとイヴの創造に似て興味深い。男が一人多いのは、この男が最初の「死」を体現しなければならないからであろう。南十字星は、この世に人間の死が存在するということの象徴でもあろう。アボリジニ神話では天体に関しては「火」が関わることが多いが、この神話では「眼」である。このことも興味深い。

この神話は、アボリジニの神話伝承のうちでも、少し特殊で異常なものを含んでいるように、私には思われる。まず、「空の王」。この神話は、ニューサウスウェールズ地方に住んでいたウィラジェリという部族のものである。彼らは、バイアーメという創造の神を伝承の内に有っていた。この存在者は、旧約聖書の世界創造神にも、ギリシャのデミウルゴス(世界形成神)にも似た振る舞いを見せる。次に「死の精霊」。単なる精霊は、ほかの多くの伝承にも現われる。しかし、「死」を司るであろう精霊、

西洋の死神にも似たこの存在者は、いったい何ものなのだろう。そして、最初に死を経験した男。南十字星は、なぜ、死んだ男の眼（と「死の精霊」の眼）でなければならぬのだろう。この神話は、そんな不思議に満ちたものであり、しかも決して「支離滅裂」ではない。それどころか、ある種の美しさと、背後に巨大な理性を感じさせる。この神話伝承は、先の「明けの明星」の伝承とは逆に、その寓意を探りたいという気を起こさせる、最も誘惑に満ちた伝承である。

<プレアデス星団>

(牡牛座にある星団「すばる」)

地球の北のほうで見える“七つ星”は北斗七星だが、南の方で見えるそれは“すばる”である。それに関わる美しい神話伝承が、「七人姉妹の物語」として、アボリジニの多くの部族に行き亘っている。

「伝説の時代」に、7人の美しい姉妹が、オリオン座から来た男たちに求婚され、それを受け容れて天上界で暮らすようになった。彼女たちはいつも、一足先に帰って食事の支度をし、オリオンの夫たちが狩から帰るのを待つ。

この伝承は、ギリシャ神話と共通点を有つ。ギリシャ神話では、天を支える神アトラスの7人娘が、神によって星に変えられた、とされている。

プレアデス星団は、オリオン座よりも一時間ほど先に、西の空に沈む。視界から消えることを、アボリジニたちは「家に帰った」と見るのである。

ほかに、全く逆の伝承もある。そこでは――

姉妹は、オリオンの男たちを嫌って、地上の各地を転々とを逃げ回った。見かねた精霊たちが、彼女たちを天上に引き上げた。男たちから姉妹を守るために、プレアデス星団はオリオン座から離れたところに置かれている。

――とされる。

2. 気象現象

こんどは、気象現象に関する神話伝承を見て行こう。

<霜>

上の話から続けるために、「霜」の伝承から始めるのが良いだろう。プレアデス星団の神話には、付随する話がある。

7人姉妹の青白い肌は輝くつららに覆われている。冬、プレアデス星団が最も明るく輝くころ、7人は地上の故郷を思い出す。いつまでも若く美しくいられるという魔法を分かつために、身のつららをこすり、静かに地上へ落とす。それが霜なのだ。

なんと美しい伝承であろう。近年、アボリジニの芸術が高い評価を受けている。このような伝承の内に、我々は、彼らの美意識を垣間見るのである。

<虹>

虹に関しては、アボリジニの諸部族の間に広く行き渡っている、有名な伝承がある。

虹は、巨大なへびが湖から湖へと移動する途中の姿である。このへびは「虹へび」と呼ばれる。平地や川や山脈、要するに大地の地形は、この巨大なへびがのたうちながら這った跡である。

この伝承は、不思議な美しさを具えてもおり、また自然に対してある種の畏敬の念を起こさせもする伝承である。虹として見えるのは、このへびの身体のおそらく一部分なのであろう。このへびの巨大さは恐ろしいもので、通常「へび」ということで考えられる概念を遥かに超えている。先に見た「ワシタカ」の場合もそうであったが、アボリジニの神話の内では、スケール(大きさ)ということについて、常識的な区別の観念がまったく無いのである。「ワシタカ」の場合には、水平と垂直の区別にも無頓着であった。アボリジニの神話伝承は、言わばトポロジックな空間観に従っていると言えるだろう。

<雷>

人間そのものが気象現象になる、という話もある。

稲妻男はワラウナユアといい、川底に住み、ワラビーを食って生きている。怒りやすい。特にモンスーン期に雨が降ると荒れ狂う。雲に隠れて彷徨い、その怒鳴り声は雷鳴となり、ピカリと光りながら長い腕と脚を伸ばし、地上には爪あとを残す。

この伝承は、稲妻の形そのものを、人間の身体の形として見ている。アボリジニにとって、人間と人間以外の動物とは入れ替わることができる。へびが気象現象と入れ替わることができるのだから、人間が気象現象と入れ替わっても、少しも不思議ではないことになる。

3. 特に“火”について

既に見たように、光る天体は火に関係付けられることが多い。それならば、火は何処から来たのだろうか。

アボリジニにとって、“火”は特別の意味を持つ。彼らは遙かな昔から、一年の一定の時期に、草原の特定の箇所に、帯状に火を付けて廻る。大陸の歴史の途中からやってきた西洋人たちには野蛮としか映らなかったこの行為は、実はアボリジニたちの深遠な生活の知恵だった。オーストラリア大陸では、乾季になると野火が発生しやすくなる。彼らのこの行為は、延焼をそこで喰い止めるための、燃焼物の空白帯を作り出すことが目的である。放った火が草を適度な幅で燃やしたあとで消えるよう、草原の湿度が最も適切になる時期を、彼らは知っていた。しかもこのことによって、新芽の発生を促し、小さな虫から始まり、彼らの狩猟の対象となる生き物に至るまでの、新たな食物連鎖を作り出すのである。こうしてアボリジニは、自然を守りつつ、しかも自然を利用する。アボリジニにとって、火は、単に灯りのためや暖を取ったりするためだけのものではなかった。彼らの生活にとって火は、自然そのものと関わり合うためにこそ必要だったのである。

<火その1>

この伝承の内では、星が既に存在していた。そして、そこから採った火が人間に与えられる。太陽や月の話を知っている我々は、少し妙な気分になるかも知れない。

「夢の時代」を更に遡る時代、天空に住む部族が在った。明るい2つの星の間にいたので、火起こし棒に星から火を付けることができた。しかし天空が食料不足になり、或る兄弟が火起こし棒を持って地上に降りた。狩に手間取っているうち、火起こし棒は退屈して追いかけてっこをし、あちこちの草に火が付いた。地上に住むアボリジニたちが集まり、数人が火起こし棒に火を付け、自分たちのキャンプへ持ち帰った。兄弟は天空へ帰った。地上の人々は彼らに感謝した。

この兄弟は、ギリシャ神話のプロメテウスに似ている。はらわたを鷲に喰われはしないけれども……。 「夢の時代」を更に遡る時代”に「天空に住んでいた部族」とは、地上の人間からは区別され、ギリシャの神々に近い存在者なのであろう。

「夢の時代」(ドリームタイム)とは、大雑把に言って「天地創造」の時代であり、大地が形成され、人間や動物たちが誕生した時代、そしてまた、それにすぐ続く伝説の時代である。だから、「夢の時代」を更に遡る時代”に、「天空に住む部族」とともに地上にも人間が既に存在した、というのは少し奇妙と思われるかも知れない。しかし、人間の誕生をどの時点に置くかということ、或いはどの時点からを「夢の時代」と呼ぶかということ、これらが、異なる部族の間で異なっても、一向に構わないであろう。

<火その2>

この伝承のうちでは、「夢の時代」に誕生した人類のストーリーが語られている。そしてその内では、火は精霊からもらったということになっている。

「夢の時代」の人類が誕生して間もない頃、ヌルグランガ族のヌマルは、精霊たちと絆があり、火を起こす技と特別の火起こし棒を有っていた。彼は寛大で、自分の部族に限らず交流した部族にも火を分け与えた。しかし、邪悪な魚族が人間に化けてやって来て、彼の特別の火起こし棒を盗んだ。ヌマルはこれを取り返したが、邪悪な者が火を独占することを恐れ、全ての人間に火を起こす技を広める決心をした。彼はすべての諸部族を廻り、火を起こす技は全てのアボリジニに伝わった。

この話も、アボリジニの諸部族の間に広く行き渡っている伝承である。この伝承は、分かち合うことの寛大さや、全人類のために求める正義といった、強い道徳性と結び付いている。ヌマルという人間を通して語られるアボリジニの精神性の高さに、充分に注意する必要がある。

また、火を起こす技は、単なる摩擦熱によるものではない。すなわち――

彼は、訪れた先々で、まず特別の木を選び彼の特別の火起こし棒を打ち付け、火花をその中に閉じ込めた。そして、必要な時にその木の小枝を二本こすり合わせて火花を取り出す、という意味付けを、火起こしの技に与えた。

———ということである。

このように、火を起こす技は一種の魔術と結び付いている、ということにも注意したい。火が神秘的なものであったということ、これは、我々が自然そのものに対して同様のものを抱くことを忘れてはならない感覚なのである。

4. アボリジンの自然観———まとめ

ここに挙げたアボリジンの神話伝承は、ほんの僅かなものである。しかしこれだけでも、神話伝承に現われた限りで、アボリジンの有する自然観の基本的な性格が分かる。

人間と動物、動物と気象現象、人間と気象現象、これらのものの<類>的な区別が撤廃される。地上と天界、生と死、これら<現実性>に関する区別も無くなり、連続的になる。距離、高さ、方向、大きさ、これらの<空間>的な契機に関する区別は、どうでもよくなる。

要するに、諸カテゴリーの間の通常の脈絡は、一切が基本的に無視される。我々は夢の中に漂っているような気分になる。アボリジンの神話伝承が「夢の時代」(ドリームタイム)と呼ばれることの意味が、ここに在る。すべてが「夢」なのだ。アボリジニたちは、訓練により、覚醒しながら夢を見るということができた。その夢の中で、彼らは世界創生の初めの時期に旅をするのである。現在に生きることは、伝説の「夢の時代」に生きることでもある。すなわち、最後に、<時間>カテゴリーの無視である。

5. 現象学からのアプローチ

この研究ノートは、纏まった研究のための一つの準備である。当センターに関わった私の研究のテーマは、アボリジンの自然観に現象学からアプローチし、このことを通じて、環境問題を考えるための哲学的基礎を獲得することである。

アボリジニにとって、現在に生きることは、伝説の「夢の時代」に生きることでもある。このように、過去の意識が現在の意識の内に生きて働いているということ、アボリジニの場合、このことが特に顕著である。現象学からアプローチすべきことは、基本的にはこの点である。

以下、現時点における研究の方向と見通しを、簡単に述べておこう。

<ヒュレー>に対して<ノエシス>作用が意味を付与しく<ノエマ>を形成するというのは、知覚に関するフッサール認識論の基本的な構造だが、この過程において既に、<意味付与>は<文化>を前提する。このことの認識論な意味が、まず明らかにされなければならない。

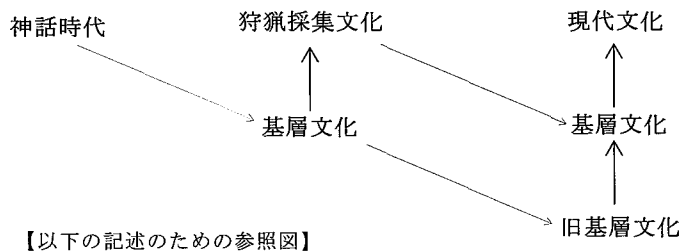
この<文化>を論ずるためには、フッサール後期の思想である<生活世界>の理論が基礎となる。生活世界は、科学「以前」の世界であり、また科学「外」の世界である。しかしまた、生活世界は、他方で科学を含む世界である。生活世界論の研究者た

ちの間では、このような生活世界の性格から現われてくるように見える「パラドックス」について論じられることが、往々にして在る。そしてまた、生活世界論に関係付けられて、特に先住民族の文化が論じられる場合、一般に「文化相対主義」の文脈の内で語られることが多い。その内で我々は、解決すべき困難な課題に直面する。

生活世界論をめぐるこれら二つの問題は、しかし、生活世界論の内に〈時間〉構造を導入することによって、一方は容易に解決され、他方は全く違った問題次元に我々を導く。

この新しい問題次元は、「基層文化」の言わば「沈殿」という側面から、先住民族の文化を考えることによって開らけてくる。この行きかたは、文化という場面に、フッサール中期の思想に含まれる〈時間意識〉の構造を組み込むこと、を意味する。

フッサールの時間意識の構造は、文化にも現われる。過去の意識が現在の意識の基底に「沈殿」しているように、過去の文化が、現在の文化の基層に「沈殿」しているはずである。



現代人にとって、狩猟・採集文化は基層文化である。自然に依存しつつ生活していた時代の意識が、現代の意識の基底にも存在しているはずである。

他方、現在でも一部のアボリジニたちにとって、狩猟・採集は現実の文化である。彼らにとっては、神話伝承の時代こそが基層文化であると言える。ここには、現代人の文明化された文化にとって狩猟・採集時代が基層文化であることとの間に、一種のアナロジーが成り立つ。しかも、現代人も、かつて狩猟・採集時代を通過してきたのだから、そのころの人間たちにも、神話伝承があったはずである。だから、神話時代は、現代の文明人にとって「旧」基層文化であり、言わば二重の意味で沈殿した「基層文化の基層文化」であると言えるだろう。

現代文化は、基本的に自然〈支配〉の意識に従った文化である。これに対して狩猟・採集文化は、自然への〈依存〉の意識に貫かれた文化である。さらにまた、神話時代の文化は、自然への〈畏敬〉の意識に発した文化であると言えるだろう。

さて、環境の保全・再生へ向かう意識は、現代人の基底に存在しているはずの自然への依存の意識に依拠している。言い換えると、環境の保全・再生へ向かう意識が現代人の内に真の意味で芽生え育つか否かは、我々現代人が、自らの内に沈殿している基層文化——狩猟・採集文化——の意識、すなわち自然への〈依存〉の意識を、基底

から表面へ浮かび上がらせることができるか否かに懸かっている。

ところが私には、一部のアボリジニたちが、言わば一つ前の時代の意識のうちで、このことを実際に成し遂げているように見える。すなわち、彼らにとっても既に基層文化となった神話時代の意識を、狩猟・採集文化のうちで、基底から表面へ浮かび上がらせることを、実際に為しているように思われるのである。このことこそ、我々がアボリジニから習い取るべきことである。すなわち、自然への〈依存〉の意識を一般的な意味で習い取るということではなく、我々自身の内に基底として存在するであろう自然への〈依存〉の意識を、ありありと現実の意識へと浮き上がらせる、その方法を習い取るということが、重要なのである。

参考文献

- ジーン・A・エリス著、国分寺翻訳研究会訳、森秀樹監修、『オーストラリア・アボリジニの伝説——ドリームタイム』、大修館書店、1998.12
- K・ラングロー・パーカー著、松田幸雄訳、『アボリジニー神話』、青土社、1996.03
- 池田まき子著、『アボリジニのむかしばなし——オーストラリア先住民』、新読書社、2002.09

執筆者紹介

所 属：室蘭工業大学・共通講座（人間・社会科学講座）

専門分野：哲学（現象学）

Email：ninom@mmm.muroran-it.ac.jp